

江戸時代庭園における西湖景観の表象と表現

—漢詩文史料の考察を通して—

李 偉

一 はじめに

「移天縮地」という神仙思想を表す道教的言葉は中国の庭園景観の表現によく使われ、自然景観あるいは神仙思想を代表とした人文景観を庭園に縮小して表現する意味である。同様な意味で日本庭園には「縮景」という言葉がある。『岩波日本庭園辞典』には縮景に関するよくまとまった解説がある。「各地の風景や名所を、縮小して庭園に取り込む手法。比較的写實的に縮小する場合と、象徴化して縮小する場合とがある」¹⁾ となっている。庭園は各時代の人々が信仰したり、面白く思ったり、憧れたりしていた理想世界を表現したものである。

日本で名所の風景を庭に写すことは、古く平安時代からの伝統である。日本最古の作庭理論書『作庭記』（平安から鎌倉時代にかけて成立）のはじめの部分には縮景のことが記されている²⁾。「国々の名所をおもいめぐらして、面白き所々をわがものになして大姿をその所になすらえてやわらげ立つべきなり」とある³⁾。これは寝殿造り庭園の作庭基本を示すと共に、庭園の縮景法の基本をも明記したものと考えてよい。自然に学び、その風景を写しながらも、「おもしろき所々」を選び取って表現しているところが、自然をそのまま原寸大で写しとるイギリス風景式庭園と異なる点である。自然を縮小して表現する造園法が、日本庭園の伝統となって現代にも影響を与えているのである。

縮景のテーマは時代の関心により異なっている。江戸時代になってから縮景の傾向がきわめて強くなってきた。庭園景観に富士山や東海道五十三次の景など、日本国内の名所地が取り入れられるとともに、海外の景観、特に中国の名

勝を好んで園内で表現する動きが見られた。こういった時代背景のもとに西湖十景が日本庭園にとり入れられ、俄かに多くの庭園で模倣され、一世を風靡した。

海外との人的移動が厳しく制限された江戸時代において、体験したことのない異国の景観を表現しようとする意欲はどこから来たのか。そしてどのように庭園という生活空間で表現したのだろうか。本稿では、日本庭園における西湖表現をケーススタディーとし、江戸時代庭園における景観受容のあり方を考察したい。

二 西湖イメージの輸入と変遷

西湖は中国随一の景勝地として世界的に有名である。三山一湖の景観については、唐代から宋、明、清を経て現在に至るまで、多くの史跡と詩が残されている（図1）。12、3世紀、南宋時代から画題や詩題として「西湖十景」⁴⁾が扱われ、名勝としての地位が確定された（図2）。西湖の景観は中国の各地で模倣され、中国人の好みの景観の一つとしてパターン化された。明代になると、中国全土で西湖と呼ばれるところは36箇所到達した。

本稿のテーマの中心となる「西湖堤」の由来についてだが、北宋時代の詩人の蘇東坡（1036-1101）は杭州在任中、西湖の西側に約二キロの長堤を築いた。彼の苗字を取って「蘇堤」あるいは「蘇公堤」と呼ばれるようになった。荷車が二台並んで通行できるほど立派なものであった。堤で二分された湖を往来する船のために、堤には石造りの太鼓橋が六つ架けられていた。堤と橋は一体になっており、「蘇堤六橋」の景が成立した（図3）。これは西湖の代表的景観であると同時に、西湖十景の筆頭になる「蘇堤春



図1 現在の西湖 筆者撮影

暁」としても親しまれている。西湖にはもともと、白居易に因んだ白堤もあったが、蘇堤を一括して日本では「西湖堤」と呼ばれていた。

西湖景観は古くから日本に知られていたが、日本庭園へ実際に写されるのは江戸時代になってからのことである。西湖に対するイメージの変遷がその要因の一つにあげられる。

まず、西湖の畔の孤山で祭られている「三賢」の詩作を通して西湖の持つ伝統的イメージを見たい。「三賢」はそれぞれ

歴史に名高い詩人の白居易（772－846）、林逋（967－1028）、蘇軾（蘇東坡）（1036－1101）を指している。

白居易は822年から三年間にわたり杭州の官僚になった人物で、『白氏文集』における西湖の名文13首がこの時期に書かれたとされる。春の西湖の美景が「錢塘湖春行」に書かれている⁵⁾。

乱花漸欲迷人眼
浅草才能没马蹄
最愛湖東行不足
緑楊陰裏白沙堤

乱花漸く人眼を迷はさんと欲し
浅草わずかによく馬蹄を没す
最も湖東を愛し行けども足らず
緑楊陰裏白沙堤



図2 西湖全圖 『西湖志』巻3より

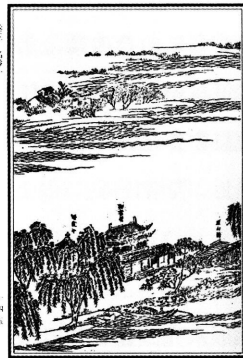


図3 蘇堤春曉 『西湖志』巻3より

そして、西湖の孤山に廬をむすび、梅妻鶴子の隠居生活を送っていた林逋（967-1028）はよく西湖に小船を浮かべ、詩を作った。中でも「山園小梅」は詠梅の名吟として人口に膾炙している。まばらな枝は、横に斜めに、浅い清らかな水に影を落としているし、おぼろな月の光の中を、その香は、どこからともなく漂ってくるという幻想的な世界に導いてくれる詩である⁶⁾。

疎影横斜水清浅	疎影 横斜して 水は清浅
暗香浮动月黄昏	暗香 浮动して 月は黄昏

中国で西湖景観をもっとも有名にしたのは、北宋時代の蘇東坡である。彼は歴史に名高い詩人であり、二度杭州の地方官に任命された官僚でもあった。蘇東坡は杭州に住んで一千首の詩を作ったと自慢したことがある。日本で広く知られる蘇東坡の名詩に「飲湖上 初晴後雨」（湖上に飲む 初めは晴れ 後雨ふる）がある。

水光激艶晴方好。	水光激艶として晴れて方に好く
山色空濛雨亦奇。	山色空濛として雨も亦た奇なり
欲把西湖比西子。	西湖を把って西子に比せんと欲すれば
淡粧濃抹総相宜。	淡粧濃抹 総て相宜し ⁷⁾

この詩は熙寧6年（1073）正月21日に、蘇東坡が西湖で宴会をした際に作られた。晴れ渡った西湖と雨の景色の違う妙趣を観察した詩人の脳裏には、たちまちあの名高い四大美人の一人—西施のおもかげが浮かんできた。西湖の風光は「薄化粧も厚化粧もよろしい」という。

西湖景観の見方の定型化が白樂天と蘇東坡らによって始められたといっても過言ではない。白樂天による春の西湖を絵と見る直喩、晴雨の西湖を美女に見立てる蘇東坡の隠喩、林逋による孤山の隠棲と仙境化、これらは僅かな例にす

ぎないが、それぞれが魅力的な西湖に対する見方を後の世へ伝えていったのである。

西湖景観の日本輸出の経緯を辿ると、838年に伝来した白居易の『白氏文集』が濫觴であったといわれる⁸⁾。しかし、千首以上の詩を収録した『白氏文集』では、西湖景観を詠った詩はわずか13首しかなかったため、日本ではそれほど注目を集めなかったようである。

先行研究によれば、13世紀～16世紀までに帰国した五山の禅僧によって書かれた『五山文学全集』、『五山文学新集』の中には、西湖に関する記録が381首もあるという⁹⁾。そのなかで六橋についての記述は26回、蘇公堤は12回も数えられる。蘇東坡の詩句も高頻度に登場するが、五山文学の全盛であった鎌倉・室町時代の日本では、西湖は美しい名勝というよりは詩文上の隠逸世界としてのイメージが強かった。日本庭園に西湖の造形的表現がなされることはなかった。

江戸時代になって、西湖はついに日本庭園に表現されるようになった。その背景には、鎖国による海外への憧憬もあったと考えられるが、西湖に関する書籍の輸入は大きな役割を果たしたと考えられる。中国からガイドブックや地方誌などの漢籍が輸入されて、それにとともに、知識人層だけではなく、一般の民衆にまで知名度が高まったことは看過できない。西湖は江戸時代の人々にとってなじみのある景観であると同時に、憧れの景勝地としてイメージされるようになり、庭園の中に表現されるようになった。

三 西湖に関連する漢籍の輸入

西湖に関わる漢籍についてみてみよう。

日本庭園に造られた西湖堤を觀賞し、そこから中国の景観を連想するには、無論共通する知識と教養が要求される。一度も中国に行ったことのない人たちもこれらの風景にあこがれを抱いていたであろう。鎖国後、日本人の海外渡航が固く禁じられたため、西湖に関する情報源は、主に漢籍の輸入に頼るしかなかった。西湖に対するイメージの変容は中国から伝来した漢籍が大きな役割を

果たしたと考えられる。

江戸中期以降、「西湖遊覧志」(1547)や「西湖志」などの輸入と同時に、出版業の発達に伴って、西湖十景は上流階級にとどまらず、一般の民衆にも知られるようになった。江戸時代の漢籍の輸入に関しては大庭修氏の研究がある¹⁰⁾。大庭氏の資料から、西湖に関する漢籍が日本に輸入された年代とその輸入形態

西湖に関する漢籍の輸入表

書名	輸入年	輸入形態
西湖佳論	享保20年(1735)	3部
西湖佳話	元禄13年(1700)	1部
	天保15年(1844)	15部
西湖擷勝	元禄8年(1695)	1部
西湖志	元禄12年(1699)	1部
	宝暦9年(1759)	15部
	宝暦10年(1760)	第4冊2部
	寛政12年(1800)	4部
	寛政12年(1800)	2部
	寛政12年(1800)	5部
	嘉永2年(1849)5月	1部
西湖志纂	寛政5年(1793)	1部
西湖拾遺	寛政3年(1791)	1部
	弘化2年(1845)	1部
西湖書院記	弘化2年(1845)5月	1部
	弘化3年(1846)5月	1部
	嘉永3年(1850)5月	1部
	嘉永3年(1850)5月	2部
西湖遊覧志	正徳元年(1711)	1部
西湖覽勝記	天保11年(1840)	1部

大庭脩編著『江戸時代における唐船持渡書の研究』より作成

を表にまとめた。それによると、17世紀の末頃から中国の景観に関する漢籍が盛んに伝来した。西湖関係の本には、『西湖佳論』、『西湖佳話』、『西湖擷勝』、『西湖志』、『西湖志纂』、『西湖拾遺』、『西湖書院記』、『西湖遊覧志』、『西湖覽勝記』などがあり、多くの文人がこれを手にしたと思われる。そして、公式の輸入のほかに、中国からの帰化僧や帰化人による伝来も加わり、かなりの量の書物が日本に入ってきた。当時、日本国内の受容が多かったからであろう。

西湖に関連する漢籍のほか、中国から名勝の遊覧記や名勝図会、中国庭園に関する理論書など、当時中国でも大量に翻刻された景観に関する著書が多数輸入された。これらの書物は日本に中国の景観を紹介した。そして、その中の漢詩や漢文から美景表現の仕方も伝来し、日本の漢詩文にこれらの表現方法が多く受け継がれたと考えられる。

江戸時代の庭園に西湖のモチーフが流行っていたが、その背景に庭園と景観関係に関する書籍の流通が大きな役割を果たしていた。もう一方では、中国の景観に関する絵画作品の流入も日本の庭園景観に大きな影響を与えた。庭園に自然を模倣することにより山水美を構成し、山水画的構成を意図することは、作庭家の常識的理念である。

日本では西湖を描いた絵画作品は14世紀からあり、鎌倉・室町時代を経て、江戸時代に入ると、画題としてさらに愛用されるようになった。これらの作品は大名屋敷や寺院内に屏風や襖として装飾され、鑑賞する側に共通のイメージを付与する役割を果たした。絵の詳しい分析は他稿に譲るが、これらの西湖図に共通するのは、実際の西湖景観をリアルに表現しようとする点である。庭園のなかで実際に縮景されるときは、一部分だけが誇張され、表現された。この意味で絵画に描かれた西湖堤は、庭園における表現よりも実景に近いことが認められる。実際の造園にあたっては、庭園の地形を考えながら、前例を模倣し、さまざまな西湖堤の表現が生まれたものと考えられる。

四 大名庭園での西湖表現と特徴

以上のように、中国から輸入されてきた漢籍によって、西湖のイメージが作りあげられた。中国景観の西湖を大名が築いた庭園の中で具体的造形をもったが、それらのうちから年代順に四つの代表例を取り上げて考察してみたい。

1. 水戸家の小石川後楽園

小石川後楽園は寛永6年(1629)から造営が始められ、江戸初期に成立した典型的な回遊式庭園である(図4)。大泉水を中心にして、大堰川、白糸滝など日本の名所をモチーフとしたデザインや、西湖堤や円月橋など中国趣味のデザインが園内各所に取り入れている。この庭園は、江戸初期の名園として、他の大名庭園に多大な影響を及ぼした。特に2代藩主徳川光圀により大成させ、朱舜水や人見道生(ト幽軒)など儒者との交遊が後楽園の景観構成に大きな影響を与えたと考えられる¹¹⁾。

寛文9年(1669)朱舜水が書いた「遊後楽園賦并序」は、光圀時代の後楽園を理解するための重要な文献である。そこに「吾が遊覧に至る処、斯園殆ど天下に於いて甲なるかな」¹²⁾と書いてある。後楽園の景観は天下無双の美景



図4 小石川後楽園の「西湖堤」筆者撮影

と絶賛されている。朱舜水は光圀が深く師事したと伝えられる中国・明からの亡命者であり、彼が後楽園の唐門、西湖堤、及び円月橋などの設計に深く関与したことは、従来の研究で指摘されている¹³⁾。『遊後楽園賦並序』には「暫し召伯の堂に休み、蘇公の陂に容与す」¹⁴⁾のように「蘇公之陂」が登場する。

しかし、朱舜水は西湖についてそれほど詳しい人物ではなかったようである。西湖堤の造築に関する次のような面白い記録が『渡邊幸庵対話』に残っている¹⁵⁾。

渡邊幸庵(1582-1711)は台徳公、忠長卿に奉仕してから、中国にわたり42

年間生活してきた。中国の諸州を見て廻り、見聞が豊富であるうえ、長寿であった。加賀藩主の徳川綱紀が家臣を命じて彼の話聞き取りした。その対話集は、後に『渡邊幸庵對話』という一巻の書物になった。西湖に関しては寛永6年2月26日の対話の中に、30日間をかかって西湖を巡見した、とある¹⁶⁾。

水戸光圀は以前朱舜水という中国人に頼んで庭に西湖を作らせたが、それはもとの西湖景観と違うのではないかと感じた。そこで光圀は、渡邊幸庵を呼んで改造してもらった。幸庵は中国に行ったときの見聞をもとに、梅柳の所在地とか、沈石の伏せ方とかを悉く直した。改造した後、光圀に西湖の絵図を献上し、庭と比べてみると、絵図上の描写とまったくかわらなかった。幸庵は、絵図を頼りに庭景を作るなら当然相違が出るが、実経験をもとに園景を作れば絵図と合致するであろうと述べた。「舜水ハ西湖をハ終に見不申繪図にて考致たる推察の旨申上候得ハ水戸様御笑被成御入候」とある。朱舜水は実際に西湖を見たことがなく、絵図を見て推察し、西湖堤を作成した。そのことを聞いた水戸様は笑ったのである。

小石川後樂園の西湖堤は、朱舜水の「イメージの具現」であった。動乱期の明末に生活した舜水に風流な遊樂を求めても無理な話ではある。大名庭園の中で、最初の西湖堤の誕生は実物の模倣ではなく、絵画による想像の産物であったことに注意しておきたい。

2. 大久保家の楽寿園

江戸湾の埋立地に造られた
四代將軍家綱の老中大久保忠朝の「らくじゅえん楽寿園」(旧芝離宮庭園)にも立派な西湖堤が架かっている(図5)。

楽寿園は延宝6年(1678)に造営が始まる。貞享3年(1686)に書かれた「楽寿園



図5 楽寿園の「西湖の堤」 筆者撮影

記」には堤の新築に関して、次のような記事がある。

新築一道長堤……稚松之竝植欲比蘇堤之柳百尺姿棟梁之勢有待焉略約之横
吟断橋之雪耶柳観花港之魚耶¹⁷⁾

「楽寿園記」にあるように、一本の道の向こうに長堤が新たに築かれ、それが中島にかかっていたこともほぼ確実である。植えたばかりの稚い松が育つのを期待して「蘇堤之柳百尺の姿」といっている。「略約（一本橋）」というのは、他の橋を指すとも考えられるが、西湖の六橋のうちの一つの橋をもって蘇堤を表現している現在の姿を見ると、略約が蘇堤を示しているとも読み取れる。

いずれにしても、「断橋之雪」、「花港の観魚」など、前にあげた西湖十景に含まれる章句が使われていることから、長堤は、西湖を強く意識して作られたことがわかる。なお、作者の菊潭という人物は、高名な儒者木下順庵の第二子である。儒教知識の豊富な学者が、日本の景観を表現しようとするとき、最初に頭に浮かんできたのが中国の景観であったことは想像に難くない。

3. 浅野家の縮景園

広島縮景園にある西湖堤は日本庭園における西湖堤表現の代表格である。
ここうきょう
跨虹橋と名付けられ、庭園の最も目立つ位置にある。直堤と半円橋の組み合わせであり、アーチ型の橋である（図6）。

縮景園は広島藩初代藩主の時代に造営されたが、宝暦8年（1758）の火災で園内建物は焼失し、1783年から8年をかけて大改修を行った。跨虹橋の造営もこの時期のことだと記録されている。架橋工事は一度目が取り壊しとなり、



図6 縮景園の「跨虹橋」 筆者撮影

再度の建て直しによってようやく重晟を満足させることができ、今日の形となった。庭師の七郎右衛門は後に、中国から輸入する生糸の買いつけをする京都の豪商となった人物である。中国通の商人であり数寄者でもあった彼によってはじめて、跨虹橋のような大胆なデザインが可能になったと考えられる。

4. 紀伊家の養翠園

養翠園が位置する和歌浦は古来歌枕の名所として知られている。「養翠園」は、十代藩主徳川^{はるとみ}治宝により1819年から8年間をかけて完成された。

養翠園の最大の特徴は、4000坪近い大泉水で、西湖を表していることである。池の中央は、クランク状に折れるが、直線型の西湖堤が主景をつくっている。妹背山へのアプローチも石造りの三断橋だが、本園にある直線状の西湖堤にも三つ橋と称する小型のアーチ橋が三つ架かっている(図7)。

養翠園のデザインは、西湖イメージの忠実な再現である。園内の施設をきわめてシンプルにし、むしろ500メートルも離れている天神山など、借景に好都合な三方の山に囲まれる「三山一湖」という景観構成を意図して作られたのであろう。杭州の西湖にある白堤



図7 養翠園の「三つ橋」 筆者撮影

と孤山を表すために園内に小丘、孤山と太鼓橋が配されている。つまり、蘇堤を中心とした西湖全体の雰囲気考慮に入れた設計である。和歌浦という万葉集に歌われた古代からの名所を、世界の景勝地である西湖の風景づくりをテキストとして江戸期の和歌浦としてまとめあげ、庭園に再現したのが養翠園であった。

5. 日本庭園での西湖表現の特徴

以下に、四つの庭園における西湖堤の概要を簡単に表で示してみた。

園名	堤の名前(現在)	成立年代(推定)	作庭者或は関連人物
小石川後楽園	西湖堤	1661-1669	朱舜水
楽寿園	西湖の堤	1678-1686	大久保忠朝
縮景園	跨虹橋	1783-1790	七郎右衛門
養翠園	三つ橋	1819-1826	徳川治宝

小石川後楽園に造られた最初の西湖堤は、目立たないところに位置し、略式の蘇堤による象徴的な表現であった。楽寿園の西湖堤は誇張された表現が見られ、それが庭景に欠かせない重要な部分となっている。縮景園の跨虹橋になると、園の中心となる本格的な石の拱橋が造られている。時代が下るに従って、江戸後期の養翠園に至っては、部分的な表現から西湖の全体的雰囲気을考慮しながら景観構成が行われるようになった。

日本の近世庭園においては、西湖という古くから文化人が憧れた景勝地をコンパクトに取り入れることが一種の風流となり、時代の流行にもなったと思われる。例にあげた四つの大名庭園のほか、千波湖（水戸）、栗林公園、浴恩園、三郭四園（奥州白河）、識名園（那覇）などでも、それぞれ違う形で理想の風景を構成している。それらの景観構成のモデルは西湖の景観であった。

五 景観評価の基準になる文献上の西湖

以上は大名庭園で西湖をどのように表現したかを考察したが、今度は、江戸時代の日本人が書いた文献の中から、西湖のイメージをみてみよう。江戸時代の文人が記した遊覧記や詩文の中に、西湖の表現がたくさん残っている。以下は、西湖を取巻くいくつかの問題を取り上げて、江戸時代の景観認識に西湖が果たした意味を考察したい。

1. 西湖十景の詩文上の忠実な再現

「儷間亭」は江戸前期の老中、大和守久世廣之くぜひろゆき（1609-79）の邸宅にある。正保年間の地図に久世廣之の邸は今の代官町と記されている。寛永図に同邸を戸田采女と記すところをみれば、廣之がこの邸を賜ったのは、寛永（1624-1643）の半ば以後であった。儷間亭築造はその後になるであろう。「儷間亭記」については正保4年（1647）の『羅山先生文集』に記されている¹⁸⁾。

それによれば、儷間亭から見られる景観は、眺望に富んでいると強調されている。武野の草、富士山の雪、東西南北、四季の景色が堪能でき、東海の遠帆、海に浮かんでいる島々が見え、風雨の中に官道を往還すると、蘇公の長堤を思い出される。これらの佳景を選んで十景を作った。姑熟十詠、西湖十景、すべての美景を縮小して儷間亭の中に表現しようとした。

儷間亭十景の命名はあきらかに西湖十景を念頭に入れながら作ったものであろう。『鷺峯先生林学士詩集』にも「和州大守久世君儷間亭十景」の詩がある¹⁹⁾。

西湖十景と対照すれば、朝対夕、鐘、鶯、月、橋、峯などのキーワードの一致や、詩に表現された雰囲気は酷似していることから、儷間亭十景は西湖の十景を正確に模倣して作ったものであろうと推察できる。以下の表は対象になる景観を図式化したものである。

儷間亭十景と西湖十景対照表

儷間亭十景	西湖十景
玉殿朝暉	雷峰夕照
暮樓鐘聲	南屏晚鐘
竹林黃鶯	柳浪聞鶯
喬松杜鵑	柳浪聞鶯
海上遠帆	三潭印月
楓山歸鳥	花港觀魚
武野草花	曲院風荷
砌池秋月	平湖秋月
官道長堤	蘇堤春曉、斷橋殘雪
士峯積雪	双峰插雲

2. 瀟湘八景と西湖十景

勝林山金地院は、江戸の芝に位置し、増上寺の西切通の上にある（図8）。当時の金地院の景観は江戸名所図会に描かれている（図9）。寛永19年（1642）に金地院の二代住職元良が自分の選んだ十二景を詩題とし、五山の詩僧および幕府の儒員に嘱して、詩を綴らせ、それは「江陵金地十二景詩軸」として傳存されている。

詩軸の序文の冒頭に「仄聞、異域西湖之勝、雖無辺八其景。八者以四乘。四今重以四乘八、所以聚之景十二也。²⁰⁾」とあるように、江陵金地十二景を選出した根拠は中国の西湖景観であった。四の倍数に数える命名法は周天の度、大歳の数だと考え、十二景を選んだのも同じ原理に基づいたものであるという。このように十二という数字の意味が大事であり、天理に沿う数字が命にかかわる魔力を持っていると信仰されていた。しかし、「仄聞、異域西湖之勝、雖無辺八其景」（異国の西湖に美景が多数あるけど、八という数字

でまとめられると聞いたことがある）とあるから、十と知りつつ、十二に替えたのである。文章の中に「残山剩水、千態萬貌、朝化暮变、疎雨淡煙、不可勝

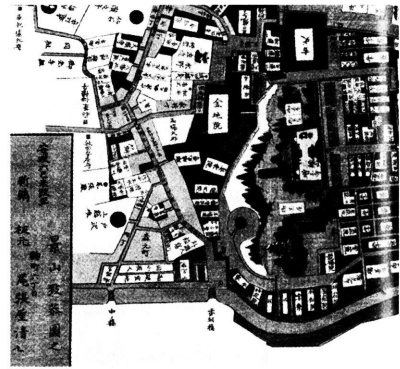


図8 金地院 浜田義一郎編『江戸切絵図』東京堂出版 1974年より

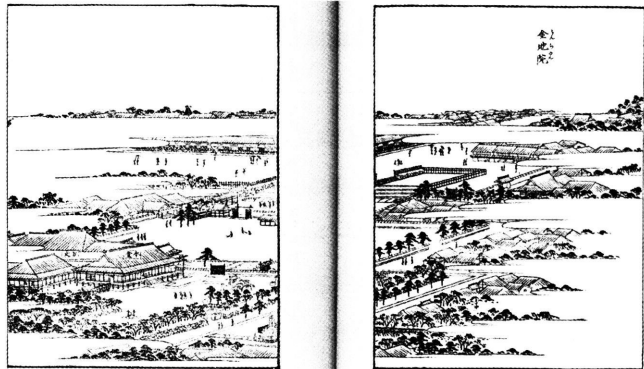


図9 金地院 鈴木栄三・朝倉治彦『江戸名所図会』上巻 角川書店 1975年より

盡相」などの言葉から、瀟湘八景の影響が見えなくもないことから、ここの「八其景」は瀟湘八景と混同したものではないかと考えられる。

瀟湘八景は西湖十景とほぼ同時期に日本に伝来した中国の景観であり、江戸時代に日本各地に〇〇八景ように瀟湘八景をちなんで名所が作られた²¹⁾。しかし、庭園では瀟湘八景は造形上に流行ってはいなかった。その原因は瀟湘八景と西湖十景の特徴から説明できると考える。

瀟湘八景は宋の画家の宋迪によってが作られた画題であり、平沙落雁、遠浦帰帆、山市晴嵐、江天暮雪、洞庭秋月、瀟湘夜雨、煙寺晚鐘、漁村落照の八景を指している。この八つの風景は、すべて「場所+景物」の組み合わせである。場所を表わす言葉に、具体的な地名を用いるのは「洞庭」と「瀟湘」の二つだけである。しかも瀟湘八景の全体を含む大きな地名であり、特定の場所を指してはいない。ゆえに画家や文人により豊かに想像させるものとなっていた。西湖十景も「場所+景物」の形を取ったが、前にあげた西湖十景には、蘇堤、南北双峰、柳浪橋、花港、曲院、平湖、南屏山、三潭、雷峰塔、断桥などいわゆる珍景の羅列になっている。瀟湘八景よりかなり具体性をもっていることから、絵画作品に西湖をリアルに描かれた理由もそこにあるのかもしれない。ある意味ではあいまい性をもっている瀟湘八景は日本にすぐ溶け込んだ。それに対し、西湖は絵画や文字上の忠実な再現から異国景観として憧れられてきた。

瀟湘や西湖などの名高い景観を用いて自国の景観を引き立てるというレトリックは「永代島九景」にも用いられ、効果的に作用している（図10）。延宝9年（1681）、僧の周光は永代島の九景を選んだ。それを題とし、詞僧らに詩を作らせた²²⁾。古来、景観を選ぶとき、八景や十景が慣例になっている中、ここに選ばれた九景は偶然ではな

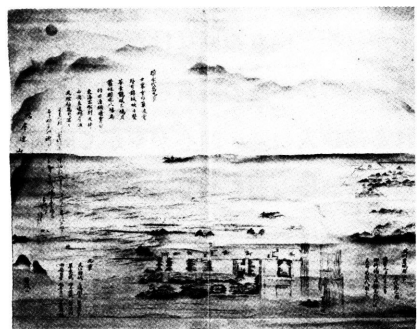


図10 永代島九景 『東京市史稿 遊園篇第一』より

かった。元禄2年(1689)、谷蓬山の「大栄山永代密寺記」に永代島九景の由来が紹介されている。

(前略) 遠而瞻之、則築波山連雲、秀于東北、富士峯載雲、聳于西南。總房之群嶺相列相疊、恰似畫圖也。幸為庭際之假山也。(中略) 嘗摘此等之佳景絶、惣以為九景也。想夫或添一景於瀟湘、或減一景於西湖者、豈無意哉。於是詩人歌客、題詠不鮮²³⁾。

永代島から遠望すると、東北に筑波山の連雲、西南に富士峯に載せた雲、總房の山々が重層に配列し、まさに絵画のような景色が展開する。これらはすべて庭の仮山に見なすべきだという。ここに、宇宙を縮小して庭の中に表現する伝統的な作庭思想が見えてくる。

これらの佳景を選びて九景を為す。瀟湘八景に一景を添えるか、或は西湖十景から一景を減らすことになる。意味深い選出であるゆえに文人墨客の題詠が盛んに行われたという。永代島九景は中国景観の選出方法に則ったが、明らかに中国の景観と区別をつけようという意図が指摘できる。

3. 「橋」に込めたメッセージ

中国の西湖には10の代表景観があるが、日本の庭園では、西湖堤という橋をもって西湖全体の景観を表出しようとしている。その原因はいろいろ考えられるが、橋という造園にはなじみの深い、造景上によく使われる手法で庭景を構成するのが、庭の鑑賞者にとって最も印象深いことだからである。橋に込められる江戸人の強い関心がやがて庭園に反映したと思われる。それを理解するために両国橋の例を紹介しよう。

両国橋は明暦3年(1657)の大火の苦しい経験にもとづき、火災後の復興施設の一つとして万治3年(1660)には隅田川に架設された。大橋と命名され、のちに両国橋と改名された。図11は江戸名所図会に描かれる両国橋の盛景である。扇子を開く形にしている橋の上から眺望の美しさと、兩岸の賑わいによっ

て江戸市民に親しまれ、この橋の下流あたりを両国川とよぶようになり、遊山船の遊興や花火の年中行事などでつねににぎわっていた。まさに江戸の繁盛の象徴になる場所であろう。『鶯峯先生林学士文集』の万治3年（1660）の条にある「武総長橋望富士山記」という記事にその繁盛ぶりが現れる。

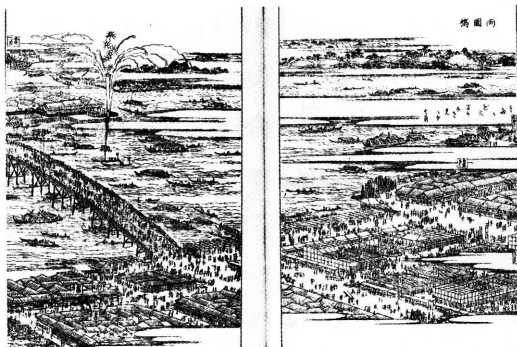


図 11 両国橋 『日本図会全集第一回』 吉川弘文館 1927年より

巨橋百尺之長虹、落雲横撰於武総之間。俗謂之両国橋²⁴⁾。

これは両国橋から遠望した富士山の美景である。百尺を超える巨大な橋で、虹みたいに武総の間に長く横たわっている。それが俗にいう、両国橋である、というのだ。さらに、この橋から遠望した富士山は無双の絶景だという。千秋の雪が富士山の上にかぶり、けっして消えることがない。万里の流れが無尽の海に入るといふ雄大な景観を鑑賞しながら、最後に評価を下すときに、西湖の橋が登場する。次の記述がそれである。

誰謂西湖之橋為佳境乎。争及両国之橋、擅壯観哉²⁵⁾。

西湖の橋は佳景だとよく言われるが、両国の橋はそれに劣らない壮観である、と述べている。このような民衆生活の交歓の場である橋が儒者の詩によって中国の風景を想像させ、いっそう魅力を増した。西湖は美しい景観の評価基準になるシンボリック的存在である。両国橋がそれに匹敵すると主張することによって、自国の景観を誇っているものと考えられる。

4. 「西湖」の認識に潜む大名の自然観

「江風山月楼」は小田原城主稲葉正則いなばまさのり（1623－1696）（美濃守）の中屋敷の別号である。『江戸名所図会』によると、江風山月楼は寛文2年（1662）の春から作り始め、翌年竣工した。江戸城の東南の海辺を埋め立てて作られた²⁶⁾。『鷲峯先生林学士文集』の1663年の条に「江風山月楼記」がある。この記によると、

楼多盛状然其中四时常有而萬古不變者江上清風山間明月也以是明楼者不亦宜乎²⁷⁾

楼にはたくさんの勝景が数えられるが、四季にわたり常に存在し、万古不変の景観として、江上の清風、山間の名月がある。それゆえ、楼に「江風山月」の名前をつけたという。ここで楼から見られる大自然の景観が、不変の景として認識された。楼に登れば、遠くには富士の雪、品川、房州の山々、萬里の片帆などを遠望でき、近くには、江戸城の千門万户、漁船の往来、などが眼下に入るといふ。

中华三韓之遠亦可以通潮可以問津廣覽之樂不亦大乎加之一庭開三池以引海潮築長堤以界破之明月臨於此則髣髴于西湖三潭之印倍蓰于洛西廣澤之光而絕勝于洞庭之秋影池中有三島如縮蓬萊羸洲方丈於咫尺如移熊野之三山於此²⁸⁾。

遠く中華、三韓までも髣髴とさせるような壮大な眺望であると捉えられている。園内の庭に潮を引くため、三つの池を設け、それを区画するために長堤を築いている。名月がここに照ると、西湖の「三潭印月」の景に似て、京都の廣澤池や洞庭湖の名月よりもすばらしいという。江戸からみる京都の名勝も中国の名勝と同じような異国空間になるのかもしれない。西湖、廣澤池、洞庭湖など、日本内外の美景を想定し、また自由に比較することにより、江風山月楼の

景観を一層引き立てていた。

5. 「西湖」に対する科学的認識

江戸中後期になると、西湖景観を単なる憧れの対象としてとらえるのではなく、より客観的に精緻に評価しようとする知識人の姿勢も見られる。『日本随筆大成』のなかから興味深い例を一、二紹介しよう。

まず江戸時代中ごろの尾張藩藩士天野信景（1663～1733）の著書『塩尻』^{しおじり}に西湖に関する記述がある。

西湖志纂要、西湖の図をのせはべる。湖のまはりの山岳大かた寺院なり。
我邦仏寺のいたづらに多きも等しきにや²⁹⁾

天野は『西湖志』をくまなく読み解き、西湖の図に描かれた湖の周りにある多くの寺院に注目し、その景観は日本の仏寺が異様に多いと変らないことを強調した。

次に、水戸藩藩士の佐藤中陵（1762～1848）が書いた『中陵漫録』巻之六の中に、西湖に関する記述がある³⁰⁾。

中陵は江戸時代後期の本草学者、実地の経験を積んで独力で本草学を究め、練達の物産家と称せられた。彼は『西湖遊覧志』の記述により、西湖景観を分析した。西湖の湖水は周囲三里、深さは三尺と記され、宋代の大旱魃で干上がったため、水は酒と同じ程度に珍重され、民は遠い所まで水を汲みに行った。中陵は日本の湖は、上代から涸れることがなかったから、その点から比較しても、西湖の水深は日本の湖より浅いと判断した。

しかし、西湖治乱の歴史を見てみると、政治の状況により荒廃と整備が何度も繰り返されている。西湖の水涸れは一時的な現象にすぎないであろう。上の記述は単なるエピソードとしての面もあると考えられる。中陵の西湖認識は『西湖遊覧志』という漢籍の分析から得られたものであって、実際の状況と隔たりが生じるのも無理はない。しかし中陵は自国の景観と大した変わりはない、も

しかすると憧れていた西湖のほうが自国の湖より劣っているかもしれないと率直な見解を述べている。こうして西湖景観を単なる憧れの対象としてとらえるのではなく、科学的に評価しようとする知識人の姿勢も見られるようになった。ともあれ、西湖の景観を用いて自国の名勝との比較が行われること自体、西湖が江戸時代の名勝評価の基準であったことを裏付けるものである。これを基準にいろいろと工夫をして日本庭園を造ったのである。

六 結 び

本論文は、日本庭園における西湖の表現をひとつの手掛りに、江戸時代庭園における景観受容のあり方を検討した。西湖景観が日本に伝来した歴史的な経緯について確認し、日本庭園における「西湖」景観の受容表現を四つの代表例を挙げて考察した。これらの庭園における表現形成の要因として重要なのは、西湖に対するイメージであり、その歴史的変遷である。

日本庭園における西湖の表現は、時代の流れに沿って変遷していった。当初は、西湖景観の部分を取り出して表現することが主だったが、時代が下るに従い、三山一湖というような全体的な雰囲気・景観を表現するようになった。その傾向はしだいに強くなり、やがて西湖をモデルとした景勝地や縮景式庭園までが造られるようになった。このことから「風景文化」の輸入のありかたを読み取ることができる。また、受容過程において、西湖景観が日本の風土と日本人の審美感覚に合うように工夫されて取り入れられた。

江戸時代になると、西湖に関する漢籍や絵画作品が多数伝来し、その解説や鑑賞により共通の認識が養われてきた。日本庭園の造形はこれらのイメージの表象をよく反映するようになったと考えられる。漢籍の輸入を機に、未体験の中国風景を想像し、その風景に見立てることのできる場所を名所として仕立てあげ、それが大名庭園に具現化された。日本庭園での西湖表現はこういった漢詩文をめぐる解説ないし誤読を繰り返すことによって洗練されてゆき、西湖の景観に対する理解も深められていった。

江戸時代の文人たちは庭園の美景や名勝を鑑賞し、漢詩文を作って表現し、詠っていた。彼らは西湖などの中国の景観と比較しながら自国の景観を評価したのである。ここでいう「西湖」は単なる美景ではなく、一つの風景イメージとして受け入れられたものと見るべきであろう。中国の景観を日本庭園で表現する際、見立てられる景観そのものより、それへの想像・イメージが先行していたといってよい。西湖に対するイメージも、中国の漢詩文の中で表現されている風景の方が先行していた。そうした中国の漢詩文を読むことによって、西湖の風景を想像し、庭園の中に表現したのである。

本稿では、江戸初期の林家周辺の資料を中心に分析してみた。西湖は江戸初期の文人の憧れの的のような存在であって、自国の景観を評価する基準とされるまで高く評価されていた。もちろん、林家の後、古文辞学派は盛唐詩に対する標榜、また大窪詩仏らの江湖詩社による南宋詩人の趣味に従って、西湖に対する感情が微妙に変わってきつつあったことも事実である（金文京氏の指摘³¹⁾）。さらに、幕末・明治時代の文学者たちによる武蔵野など日本の生活風景の発見、西洋景観の流入などにより、昔の名所に対する認識が変りつつあったことは看過できない。今後の課題としたい。

〔注〕

- 1) 小野健吉
2004『岩波 日本庭園辞典』岩波書店 p. 138
- 2) 林屋辰三郎
1973『古代中世芸術論 日本思想大系23』岩波書店 p. 224
国々の名所をおもひめくらはして、おもしろき所々を、わがものになして、おほすがたを、そのと
ころになずらへて、やほらけたつべき也。
- 3) 上原敬二
1982『解説 山水並に野形図・作庭記』加島書店 p. 71
- 4) 西湖十景：蘇堤春曉 双峰挿雲 柳浪聞鶯 花港観魚 曲院風荷 平湖秋月 南屏晚鐘 三潭印
月 雷峰夕照 斷橋残雪
- 5) 鶴田久作
1957『白楽天詩集第3巻』統国譯漢文大成 文学部第12巻 東洋文化協会 p. 464
- 6) 今関天彭 辛島驥
1966『宋詩選』漢詩大系 第16巻 集英社

- 7) 近藤光男
1964『蘇東坡 漢詩大系 第17卷』集英社 p. 112
- 8) 大庭脩
1997『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ』研文出版 p. 53
- 9) 舒淇・進士五十八
1999「日本における中国杭州西湖の風景イメージの定着化についての考察」『ランドスケープ研究』(62) 5. pp. 469-472
- 10) 大庭脩編著
1967『江戸時代における唐船持渡書の研究』関西大学東西学術研究所
- 11) 李偉
2005「初期小石川後樂園における眺望行為に関する研究」『ランドスケープ研究』(68) 5. pp. 373-376
- 12) 朱舜水
1669「遊後樂園賦并序」『朱舜水集卷十二』(1981) 中華書局 p. 429
余以異邦枵朽、倚蒹葭於玉樹之藩。轉落英之曲逕、經臥波之長橋。爭妍競艷、日炫心招。(中略)
余覽天下之名園多矣。……就吾遊覽之所至、斯園殆甲於天下矣
- 13) 計見東山
1909『後樂園全』東京育英社
田村剛
1929『後樂園史』刀江書院
吉永義信
1937『小石川後樂園(名勝調査報告第三輯)』文部省
- 14) 朱舜水
1669「遊後樂園賦并序」『朱舜水集卷十二』(1981) 中華書局 p. 429
於是暫休召伯之堂、容與蘇公之隄
- 15) 近藤瓶城校
1902『渡邊幸庵對話』近藤活版所 p. 203
水戸光圀卿以前舜水と申唐人に被仰付御庭の西湖相違有之旨難し申段御聞及候て予見分致候通り直し候様にと被仰聞則梅柳の在所沈石の伏様予入唐致し見申候通り悉く直申候造作なる事にて候其後あなたより渡り申候繪図に御引合御覽被成候に少も相違無之旨被仰聞候惣て繪図に致したる分にてハ相違可有之候見申候通に仕立其上にて繪図に合せ候得ハ相申事に候舜水ハ西湖をハ終に見不申繪図にて考致たる推察の旨申上候得ハ水戸様御笑被成御入候
- 16) 同15) p. 250
- 17) 小杉雄三
1981『旧芝離宮庭園』郷学舎 p. 20
- 18) 林羅山
正保4年(1647)「儷問亭記」『羅山先生文集』弘文社 pp. 184-185
竹間之黃鸝松上之子規潭心之月武野之草富山之雪是東西南北之四時也目送楓山之衆鳥覺其倦飛而知還眺望東海之遠帆浮扶桑鬱島之齊萍向雨往風還之官道感蘇公堤之柳色採此等佳勝以為十景可謂清新矣姑熟十詠西湖十景共和縮地於此矣
- 19) 林鶯峯
「和州大守久世君儷問亭十景」鶯峯先生林学士詩集 東京市史稿 遊園篇第一(1929) 東京市

役所 pp. 299-301

玉殿朝暎 出日初昇東海陬。朝朝相對武城樓。一輪回軌玉階路。照見扶桑六十州。
暮樓鐘聲 蒲牢一吼夕陽移。樓外遙聞自警時。沙麓南屏又湘寺。入詩入畫摠相宜。
竹林黃鶯 自在嬌鶯翠密陰。春風刷羽入清吟。竹林深處聞絃管。一曲欲聲中散琴。
喬松杜鵑 青松茂蔭向欣榮。謝豹幾回來喚鳴。庭際元無斧斤到。聲聲枝上月三更。
海上遠帆 海濶潮通來去船。雲波葉葉小窓前。蓬萊弱水莫言遠。一葦風輕萬里天。
楓山歸鳥 神威豈嘗鎮東關。草偃風雲四海間。好去群禽日將晚。料知靈鳳集楓山。
武野草花 武野迢迢路更賒。望中衆草愛年華。一天廣漠平蕉色。半是雲煙半是花。
御池秋月 月臨止水照殘漪。砌下晴來爽籟吹。描得漢宮秋色否。嬋娟孰與影娥池。
官道長堤 官道東南北又西。三々五々踏無迹。銀鞍白馬幾多少。來往風塵共一庭。
土峯積雪 富岩突兀日邊煙。白雪凌霄是絕巔。窗外寒花非頃刻。千秋西嶺四時天。

20) 元良

寬永19年(1642)江陵金地十二景詩軸 東京市史稿 遊園篇第一(1929)東京市役所 pp. 279-284
仄閑、異域西湖之勝、雖無迦八其景。八者以四乘。四今重以四乘八、所以聚之景十二也。蓋十二者、其對忘一歲之律、分則又應二十四氣之數。部為七十二候、亦復此數也。或四景八景十二景、如此乘而至第九、則小周三十六、大周三百六十有奇之數、亦應之。周天之度、大歲之數、自十二置至于茲者乎哉。匪啻此十二景之為景者不外此中、殘山剩水、千態萬貌、朝化暮變、疎雨淡煙、不可勝盡相

21) 堀川貴司

2002『瀟湘八景—詩歌と繪画に見る日本化の様相』臨川書店 p. 9

22) 僧周光

延宝九年(1681)永代島九景:武江錦城 羽田漁村 三島閑月 總房連山 海上遠帆 華表白鶴
西嶺夏雪 築波雙峯 靈岩晚鐘
東京市史稿 遊園篇第一(1929)東京市役所 p. 540

23) 谷蓬山

元祿2年(1689)大柴山永代密寺記 東京市史稿 遊園篇第一(1929)東京市役所 p. 561

24) 林鶯峯

万治3年(1660)「武總長橋望富士山記」『鶯峯先生林學士文集』第15卷 p. 27 国文学研究資料館所藏

山不為不多高焉、獨秀於十五州者富士也。高哉富士。在此眺之、在彼望之、遠而固奇、近而亦宜矣。巨橋百尺之長虹、落雲橫橫於武總之間。俗謂之兩國橋。在此橋望彼山、則絕景無雙。頭戴千秋之雪、終天不消。影送萬里之流、入海無盡。玉龍之動、移臥波之勢。白鷗之鱗、認都鳥之色。鵝毛之吹、亂群鶯之列。素笠之擊、重漁蓑之肩。銀眉之散、混岸沙之推。瓊樓之聳、擬複道之通。起鄭紫左驢之思、做趙閑駐馬之看。誰謂西湖之橋為佳境乎。爭及兩國之橋、擅壯觀哉。

25) 同24)

26) 鈴木棠三・朝倉治彦『江戸名所図会』上卷 角川書店 1975年 p. 206

27) 林鶯峯

寬文二年(1663)「江風山月樓記」『鶯峯先生林學士文集』卷六 pp. 1-4 国文学研究資料館所藏
樓在江城郭外東南海畔……樓多盛狀然其中四時常有而萬古不變者江上清風山間明月也以是明樓者不亦宜乎登樓遠望西南則土嶺千秋之雪與白云俱飛連筇根之山而懸寸眸之中品川三緣山之岑蔚層塔相並在指顧之間東則房州之遠峯捧三架之花開卓女之眉而萬里之片帆飄飄搖搖如葉之浮如葦之橫近則洲崎之屋舍隔水比東南之鄰而江城千門萬戶疊飛于西北俯視則漁船來往浮家泛宅維葦維絲小鮮吞釣大

魚罹網況夫舟船西舫檣相盪酒食歌謠以遊以敖浩浩之波茫茫之云天水一色中华三韓之遠亦可以通潮可以通潮可以同津廣覽之樂不亦大乎加之一庭開三池以引海潮築長堤以界破之明月臨於此則鬢鬢干西湖三潭之印倍蕪于洛西廣澤之光而絕勝于洞庭之秋影池中有三島如縮蓬萊羸洲方丈於咫尺如移熊野之三山於此（後略）

28) 同27)

29) 天野信景

1977-1978『塩尻』日本隨筆大成第三期13 吉川弘文館 p. 88

30) 佐藤中陵

1976『中陵漫録』日本隨筆大成第三期3 吉川弘文館 p. 131

西湖の里程

明の僧心越云く、日本の一里は本国の十里なりと云。しかれば、西湖遊覽志に、西湖の周繞三十里とあれば、即三里廻りの湖水たる事をするべし。其深さ三尺に過ぎずと云。即志曰。宋熙寧元祐間。大旱水涸。民遠汲。斛水直七八錢。至以罌缶貯水。相餉如酒禮。此説を見れば、更に水の涸す事あり。日本の湖水は、上古より涸す事なし。其浅き事またしるべし。

31) 金文京

1994「西湖と不忍池」『俳諧と漢文学』和漢比較文学叢書第十6巻 和漢比較文学学会編

* 討議要旨

鈴木淳氏は偷問亭十景について、「土峯積雪」は富士山、「武野草花」は武蔵野の草花というように、大きな枠組みを西湖十景に借りているが、個々の事例は日本のものなのではないか、と尋ね、発表者は、確かに大きなイメージは一致するが、細かい点についてはさらなる詩句の検討が必要であると思う、と回答した。

相田満氏は堤と橋がどの例でも登場するが、それについてはどう考えているか、と質問し、発表者は、橋は庭をつくる上で表現しやすい部分のため多用されたのだろう、と答えた。

ロバート・キャンベル氏は近世の文芸思潮の変遷の中で、鷺峰や鳳岡の次の世代になり、古文辞派が台頭してくると西湖のイメージは、あまり使われなくなるということが起るのではないか。また、後期になるとそれが解消され、大名庭園に限定されず、都市の風景の中に見立てとして使われるようになるのではないか。今回は大名庭園についての発表であったが、そうした方向に広げて考えてほしい、と述べた。